



シルバーだより

No. 303

平成 27 年 9 月 1 日

荒川シルバー大学

荒川区荒川 3-49-1

理事長 岡田芳子

TEL 3801-5740

FAX 3801-5691

— 好奇心に乾杯 —

理事長 岡田芳子

「シルバーだより」が創刊から今年の 6 月 1 日で 300 号に達しました。シルバー大学で学ぶ学生はほとんど昭和生まれです（大正生まれの学生ももちろんいます）。昭和生まれの学生が平成の時代を見つめ、喜びや悲しみの経験を生かし記事を充実させています。学校全体のことを知るのに最も適しています。じっくり読んでほしいと思っています。

ところで、前回の役員会で、「皆さんの家に届く一般紙の号数をご覧になったことはありますか」と質問しました。

- ① 朝刊と夕刊の号数は同じですか、違いますか。
- ② 夕刊がお休みの時は、次の日の夕刊の号数はどうなりますか。

と話しかけ、正解は今日の新聞を見て下さい。と正解は申しませんでした。

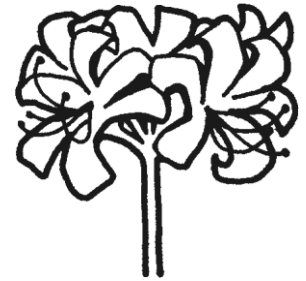
教室代表の方や班長さんたちが「役員会で理事長さんがこんな話をされました。でも正解は言いませんでした」と話題になったようです。私は、好奇心を持たれた学生の皆さんに脳に刺激を与えられたとうれしくなりました。ところがです。それからしばらくして町で私を呼び止めた学生が「それで正解はどうなんですか。私は夕刊をとっていないので比べられません」と。ずっともやもやしていたことが分かりました。「正解は 9 月号のシルバーだよりで書きます」と、伝えました。

正解は、

- ① 朝刊も夕刊も号数は同じです。
- ② 夕刊がお休みでも朝刊が届けられているので、みなし号となりいつも朝夕刊号は同じ号です。

我が家に届く新聞での事で、5 万部を超えています。他紙もこの前後でしょう。

これからもシルバー大学で楽しく学び、興味・関心の輪を広げて下さい。暑い夏をのりこえた御身を大切にしましょう。



今月も先月号に引き続き、「昭和の記録」より一編掲載します。

《 ソ連捕虜収容所の辛かった思い出 》

満州牡丹江東寧県にある兵器補給庫に勤めていた私は、昭和 20 年 8 月 9 日の早暁、追われ追われて 6 日間の逃避行の末、辿り着いた処が朝鮮国境に近い延吉であった。

そこで私は軍属仲間と共に延吉駐屯の二八部隊に収容され、父と妻は家族仲間と近くのキリスト教の教会に収容された。

ソ連軍の捕虜となった私はおよそ一千人の兵隊に混じってソ連領に入り貨車で北へ北へと向かう。幾日かして大きな川辺に着いた。アムール河か？貨車はそのまま船に乗り入れて対岸に着く。コムソモリスクと云う街で、すぐにビヤニーと云う地名のコロニー（ロシア語で収容所）に収容された。昔女優の岡田嘉子が恋人と樺太からソ連に逃避行した辺りか？



いよいよ辛苦辛苦の 4 年に亘る抑留生活が始まるのである。シベリア抑留については多くの人の記述によりよく知られているが、4 年間の生活の中で最も辛かった作業の事を書いてみよう。

その作業は、川幅 1 キロメートルか 2 キロメートルのアムール河？に鉄道を敷くのである。我々日本人には、川に鉄道など思いも寄らないのだが、9 月に列車ごと船で運ばれた川へ鉄道を敷くわけで流石はシベリアだと思った。

凍結した時期 12 月の末頃、2 名の看守兵に守られた数百名の捕虜が川辺に到着。早速作業にかかるのだが、気温はマイナス 30 度位か、まつ毛が凍り付いて目が開かなくなり鼻や頬が感覚を失ってしまう。

川はただ一面の白い氷の岩石がごろごろしている荒野だ。陸地と違って風をさえぎる物もないし遮蔽物も無い川の真っ只中では、吹き荒れる風によって体感温度はマイナス 40 度より下がっている。氷の厚さは 1 メートル位ある。作業はまず氷の岩を取り除いて平らに均すことから始める。そして平らになった氷の上に枕木を並べて行く。測量班から OK ができると、穴を開けてあった氷の下の川の水をバケツで汲み上げる。その水を枕木の下にぶちまける。途端に枕木は盤石となりビクともしなくなる。その上にレールを敷いてゆく。これがアムール河の鉄路施設だ。そして列車が陸地と結んだ川の上を氷が緩み出す頃まで走り続ける訳だ。

やがて 3 月になると時期をみて、レールや枕木が撤去され連絡船が運航されるのである。

この作業の辛さは、厳しい寒さと、どんなに疲れていても腰を下ろす場所も無ければ、身体を休める事も出来ない事。又痩せこけた身体で氷を割る鶴嘴（工具）の重い事。たまに休憩があっても足の指が凍傷になる恐れがあるから、足踏みをしていなければならない。

やがて昼近く、コロニーから待ちに待った昼食が大きなビヤ樽にカーシャ（おじや）をいっぱいに入れて運ばれてきた。「作業やめ！」の声に、待ち焦がれた食事である。捕虜たち全員唯々空腹に耐えかねての、食いたい食いたいの毎日であった。

一個分隊 15 名位が、各自腰に下げている蜜柑やパイナップルの空き缶を氷の上に並べる。当番が柄杓で茶碗に一杯位のカーシャを注いでゆく。15 個を注ぎ終わって自分の缶を取って食べる頃には、早くも上の方は凍り始めているのだ。こうして足踏みをしながら喰うカーシャの旨いこと。だが量がたりないのだ。そして最後の一滴を舐めようとしても凍り付いていて、舌では取れなくなるほどだ。

この様な寒さの作業中、州のお偉方の視察がありガバジル（監督）が大きな声で叱責されていた様だったが、間もなく作業止めの号令が掛かる。全員大喜びだ。疲れと冷え切った身体をいつときも早くコロニーに帰って暖かい部屋で休みたいからだ。後で知ったのだが、捕虜を使役する時の温度が零下 30 度以下になると、作業をさせてはならない規則があるとかで、コロニーへ帰されたのである。

さて、嬉しい帰りだが、四列縦隊になって、顔を刺す吹雪の中を重い足を引き摺りながら、左右の人の顔を見ての行進だ。隣の人鼻が白くローソクのように変わっていくのが解る。本人は感覚が無いらしいが、此れが凍傷の初めの症状だ。少しでも白く見えたなら、本人に鼻がやられていると知らせる。本人は慌てて防寒手袋で激しくこする。若しこれを怠って、白くなった儘暖かい部屋に入れば、凍傷の第一歩になるのである。



こうして 4 年に及ぶ辛く苦しい、伐採、鉄路、道路建設、煉瓦作り、その他多くの作業に耐え、懐かしい故国に帰って来たのは、昭和 24 年の秋であった。

（平成 17 年 9 月 記 元自分史教室 加藤 袈裟一 現在 98 歳）

訃報

日本の話芸・絵手紙 B 教室の塚田義介講師が、8月2日逝去されました。平成18年からおよそ10年。学芸会での発表は、参加者を楽しませてくれ、日頃の授業がどれほど充実していたかを感じさせてくれました。大きな身体と柔和なお姿が今もなお見えるようです。悲しい事です。

天国で、日本の話芸の講師としてご活躍くだされば、と願う気持ちでいっぱいです。
(広報委員会)

9月の行事予定♪

期日	行事	プログラム
30日 (水)	合同講義 兼杉三枝子 秋のコンサート ピアノ：代島きよ子	独唱：浜千鳥・モーツァルトの子守唄・オペラ「ルサルカ」より 月に寄す歌他 独奏：月光他
会場：ムーブ町屋 三階 ムーブホール 開演 14時		

◆◆◆◆◆ **学 園 日 誌 (8月)** ◆◆◆◆◆

- | | |
|--------------------------------|------------------------------------|
| (7/29) 8月常任理事会・役員会
(学園祭の件他) | 13日 陶芸教室 28年度日程作成
(教室清掃業務に関して要) |
| 7日 社協 福祉団体運営助成
に伴う書類提出 | 17日 学園祭共催依頼書提出 |
| 13日 学園祭お茶席・茶菓子券準備 | 19日 広報委員会 |
| | 25日 シルバーだより303号作成 |

※事務局だより※**① 9月2日、台湾台北市より30名の訪問あり**

生涯学習に携わる30名の先生方が台湾より来日し、午後4時過ぎより音楽教室・書道金曜の授業を参観していただきます。

小林敦子教育委員長のご推薦によります。

② 9月の変更教室：書道金曜教室は2日、4日、18日となります。

音楽教室は2日、5日、19日となります。

(メールアドレス) arakawa-silver@tcn-catv.ne.jp

(ホームページアドレス) arakawa-silver.com/

(事務所) TEL 03-3801-5740 FAX 03-3801-5691

室長・田原